

日本音楽集団1982年度前期コンサート・シリーズNo.72

平和コンサート

平和のために日本の伝統をみつめ直す……

1982年7月7日(水)午後7時開演

青山タワーホール

構成・内田とも子・安倍久恵

主 催

現代邦楽協議会

日本音楽集団

——曲目と演奏者——

一、平和への前唄——へいわへのまえうた—— 作曲・内田とも子

〔琵琶と歌〕 田原順子 〔笛〕 藤崎重康 〔尺八〕 米澤 浩
〔箏〕 滝田美智子・熊沢栄利子 〔十七絃〕 内藤洋子 〔打楽器〕 安倍久恵

二、みだれ 作曲・八橋検校

〔箏独奏〕 白根きぬ子

三、碇知盛——いかりとももり—— 作・岡本一彦 作曲・半田淳子

〔琵琶弾き語り〕 半田淳子

四、金閣賦・ソネットⅤ——きんかくふ—— 作曲・三木 稔

〔尺八独奏〕 坂田誠山

五、一谷嫩軍記・熊谷陣屋の段——いちのたにふたばぐんき・くまがいじんやのだん—— 作・並木宗輔 竹本駒之助(客演)、坂井敏子(三味線)

六、火之華ばやし・木遣と即興による——ひのはなばやし—— 監修・若山胤雄 構成・安倍久恵

〔笛〕 望月太八
〔打楽器〕 林 英哲・河井継之・前嶋美紀(以上客演)・堅田啓輝・安倍久恵

ごあいさつ

みなさま、今日はお忙しい中、お出かけ下さいましてありがとうございます。

平和への運動の気運が高まる中、各地で様々な催しがおこなわれています。裏返していえば、それだけ戦争の危機を身近に感じるような時代になったということでしょう。今日のコンサートでは、奏者の方々に、「平和のために日本の伝統をみつめ直す」ということで、曲を選んでいただきました。そして、このようなプログラムを組むことができたのは、出演される方々の熱意のおかげだと思います。

それぞれの演奏にこめられた願いを、どうぞじっくりとお聞き下さい。

(内田とも子)

この演奏会にあたって、御協力いただいたすべての皆様に、心より感謝いたします。ありがとうございました。

(安倍久恵)

—曲目の解説—

平和への前唄

平和な明日のために、今、私達がやらなければならないことは何なのか。そんな問いかけを、琵琶を中心とした七人の奏者で表現してみようと思いました。

同じ言葉のくり返しを使って、琵琶うたということにはこだわらずに自由に書きました。訴えたいことが十分に伝えられるか、不安はありますが、少しでも何かを感じとっていただければ幸いです。
(内田とも子)

みだれ

みだれは、「乱輪舌」「十段の調」等ともいい、「六段」「八段」とともに八橋検校(1614~1685)の作といわれている。声楽中心の古典の中では数少ない純器楽曲の一つとして、段物に属している。整然とした段物の規則的楽曲構成をもつ「六段」「八段」も美しい。しかし、この「みだれ」の不規則そして自由にかさなる美しいモチーフの中に、私はより深い味わいと限りない魅力を感じる。長い歴史の中を生きぬき、現代なお私たちの心をうつ名曲がさらにのちの世にいつまでも生きつづけてほしいといのりつつ。
(白根きぬ子)

碓知盛

源平最後の決戦となった壇の浦。元暦2年(1185)3月24日の卯の刻、両軍の間に矢合わせが行われた。戦況は、はじめ平家方に有利であったが、種々の奇瑞が現われ、形勢は逆転する。戦いに破れた二位殿は、幼い帝もろともに、海中に身を投ずる。それを見とどけて、平知盛卿は「見るべき程の事は見つ」という言葉を残して、鎧二領に兜ふたはね、その上になお碓をいただいて自分も海中に洗む。この平家の滅亡を描いた場面を、今回は演奏いたします。

——人類は今日まで戦いの歴史をくりかえして来たわけですが、伝統音楽の中に生きていたものとして、そのむなしさ悲しさを、平家物語の題材を借りて、また弾き語りという手法を借りて、訴えることができたならと今夜のコンサートに臨みました。
(半田淳子)

金閣賦・ソネットⅤ

この曲は本来、今春、劇団青年座によって上演された、水上勉作「金閣炎上」の劇中音楽として作曲され、それをもとにして尺八独奏曲として完成させたものである。伝統を葬ろうとするものへのプロテストと、美を守る願いを、一本の尺八にたくした曲で、ソネット・シリーズの5番目になります。
(三木 稔)

個人個人のささやかな平和への祈念が国連軍縮総会に向けて結集し、大変な盛り上がりをもせている昨今、この願いが世界に通じることを願っています。

6・13、ニューヨーク・セントラルパークにおける50万人とも100万人ともいわれる、米国史上空前の大規模なデモに参加し、そのパワーに驚き、このエネルギーこそが世界を動かすものと痛感いたしました。
(坂田誠山)

一谷嫩軍記・熊谷陣屋の段

源氏 熊谷直実]——小次郎
妻 相模

平家 藤の方盛]——平敦盛 (実は院の御胤)
経

敦盛の首を討った熊谷が陣屋に戻ると、妻、相模が、息子、小次郎の身を案じてそこに来ている。「討死も名誉」と口先では言っている、小さな手傷にさえも心を痛めている相模の母心。一方、源氏の武士に追われて、陣屋に来ていた藤の局は、熊谷が、息子、敦盛の首を討った物語を聞き、嘆き悲しむ。

——いつの時代にも、どこの国においても、戦場に我が子を送る母の気持ちは同じです。このコンサートにおいて、心から平和を願います。
(坂井敏子)

火之華ばやし・木遣と即興による

遠 花 火 大太鼓 線 香 花 火 篠 笛
川 開 き 木 遣・江戸囃子 ね ず み 花 火 木 鉦・木 魚 他
打 上 げ 花 火 桶 胴 太 鼓・メ 太 鼓 群 仕 掛 け 花 火 篠 笛・能 管、大 太 鼓・大 拍 子

——夜空にさく、光と音の花、花火、その原料の火薬は使いようによって凶器に変わります。

時の短かさ、人の生命のはかなさを教えてくれる花火に思いをこめて、地球上から、むだな戦いがなくなることを祈ります。
(安倍久恵)

■客演紹介

竹本駒之助——たけもとこまのすけ——

無形文化財の竹本越路太夫に師事。中学時代より大阪にて修業を積む。現在、女流義太夫の第一人者として活躍。

若山胤雄——わかやまたねお——

無形民俗文化財。若山流江戸囃子四世家元。現在、東京芸術大学の非常勤講師として、江戸囃子の講義を行っている。また長唄囃子では、鳳声晴雄として、第一線で活躍している。今回は木遣の内の江戸囃子について監修をお願いしており、門下生の河井継之、前嶋紀之のお二人に助演をお願いしました。

林 英哲——はやしえいてつ——

19才より、佐渡の鬼太鼓座創設メンバーとして、11年間公演活動。今春より独立、新たな創造を旨とし、スタートを切る。今年、8月27・28日に「日本の太鼓」公演（国立劇場）に出演、9月4・5日に「スペース桐星」で赤尾三千子氏と共演予定。

象潟象聲会——きさかたしょうせいかい——

昭和47年、江戸鳶木遣の三本指に入る、象潟の鳶頭・保坂金三郎氏を師匠に迎え町会有志により発足。アマチュアとして鳶の職域である屋外ではいっさい行わないという点でけじめをつけながら、けいこにはげんでいる。粹でいなせな木遣にひかれたメンバーの職業は千差万別だが、りくつでない、きつぶのよさで今回出演いただいた。

象聲会今回の出演メンバー（自称キヤリスト）

本橋成介（会長）・小池隆良・吉田 巖・丸茂 章・中村靖弘・中村伸夫・田原 徹・荒川元治・石垣俊雄・蓮見和彦

※今回の演奏会のチラシの中で、「一谷嫩軍記」を作曲・並木宗輔とありましたが、作のまちがいでしたので訂正いたします。

チラシデザイン・森 香織

日本音楽集団 東京都渋谷区神宮前6-16-14 小早川ビル 電話 03-409-5374

日本音楽集団推薦

琴・三絃・十七絃・二十絃

琴光堂和楽器店

〒152 東京都目黒区碑文谷2-19-15

TEL 東京03-792-8481 横浜連絡所 045-363-5448

中島 隆